

後期ボードリヤールの社会理論の社会学的検討

——透明性、無、悪、不可能な交換——

信州大学 水原俊博

1 目的

本報告は、2007年に他界したフランスの思想家ボードリヤールの後期の著作、つまり、「後期ボードリヤール (the later Baudrillard)」について、「透明性」「無」「悪」「不可能な交換」「非一出来事」といった鍵概念について、社会学的な視点から検討することを目的とする。ボードリヤールの理論的軌跡は、おもに文芸批評を執筆した初期、記号論的消費社会論（消費の応用記号論的考察）、シミュレーション論からなる中期、上述した独特の概念を用いて思想を展開した後期にわけられる。これまで、日本の社会学界では中期の消費社会論、シミュレーション論について、理論研究、事例研究、計量分析が展開され、海外の研究に劣らぬ優れた成果をあげてきたとあってよい。だが、前期、後期の著作については検討されてきたとはいえない。また、中期の消費社会論に目を奪われるばかりに、それ以外の社会学的な視点、たとえば、情報社会論的な視点から、ボードリヤールの社会理論をじゅうぶんに検討してきたともいえないのではないか。こうしたことから、本報告では、後期を代表する著作（末尾の主要文献参照）で重用される諸概念を、消費社会論に拘泥せず、情報社会論など広い社会学的な視点から検討していく。

2 方法

本報告では、上述のとおり、消費社会論に限定せず、情報社会論など広い社会学的視点から、後期ボードリヤールについて検討していくことになる。とはいえ、後期ボードリヤールでは、中期の議論が別言、変奏、焼き直しされることも少なくなく、後期ボードリヤールの鍵概念を吟味したところで、現代社会の特性を社会学的に検討するのに有益な理論的な知見を、あらたにえることは難しいかもしれない。この場合、後期ボードリヤールの社会学的可能性はない、あるいは乏しいと結論づけることになるだろう——これ自体はひとつの知見ではあるのだが。

3 結果

紙幅の都合で詳述はできないが、後期ボードリヤールでは、資本（経済）、性、政治、情報が現実から自立し、他領域に拡散することが指摘される。そして、なかでも、情報が重要な役割を果たし、高度情報化によって、情報ネットワーク（情報の脱領域的な換喩的連結）、現実を従属させる情報と現実との不均衡な関係が不確実なものとなり、現実では「非一出来事」が间歇泉のごとく突発するという。こうした事態が近年のテロリズム、戦争、金融（経済）、性愛、現代芸術、大衆文化を事例に、独特な概念を用いて説得的に語られる。本報告では、理論的な検討をおして、これらの概念には、社会学的な視点から一定の理論的意義があることが示されるだろう。

文献

- Baudrillard, J., 1990, *La transparence du mal: Essai sur les phénomènes extrêmes*, Paris: Galilée. (=1991, 塚原史訳『透きとおった悪』紀伊國屋書店.)
- , 1991, *La guerre n'a pas eu lieu*, Paris: Galilée. (=1991, 塚原史訳『湾岸戦争は起こらなかった』紀伊國屋書店.)
- , 1995, *Le crime parfait*, Paris: Galilée. (=1998, 塚原史訳『完全犯罪』紀伊國屋書店.)
- , 1997, *Le paroxyste indifférent: Entretiens avec Philippe Petit*, Paris: Grasset.
- , 1999, *L'Échange impossible*, Paris: Galilée. (=2002, 塚原史訳『不可能な交換』紀伊國屋書店.)
- , [2001] 2002, *L'Esprit du terrorisme*, Paris: Galilée. (=2002, 塚原史訳「テロリズムの精神」『環』8: 37-49.)
- , 2004, *Le pacte de lucidité ou l'intelligence du mal*, Paris: Galilée. (=2008, 塚原史訳『悪の知性』NTT出版.)
- , 2007, *Pourquoi tout n'a-t-il pas déjà disparu?*, Paris: Herne. (=2009, 塚原史訳『なぜ、すべてがすでに消滅しなかったのか』筑摩書房, 9-47.)